

今週のメニュー

■ [トピックス1](#)

◇PVC News No.108 号を発行

■ [トピックス2](#)

◇経済産業省が「世界の石油化学製品の今後の需給動向(2017年)」を公表

■ [編集後記](#)■ [トピックス1](#)

◇PVC News No.108 号を発行

塩化ビニル環境対策協議会

塩化ビニル環境対策協議会（JPEC）は、11月15日に [PVC News No.108](#) 号を発行しました。今回の特集は「文化と塩ビ」がテーマです。東京大学の野口貴文教授には「世界文化遺産・軍艦島の建築物保存の取り組み」についてお話しいただきました。それに関連して、鉄道車両において新幹線をはじめ軽量化や安全性向上による高速化に塩ビ製品が貢献していること、また太陽の塔から自動車のラッピングまで幅広い用途で塩ビフィルムが活躍している事例を紹介しています。

巻頭では、野口貴文教授に2017年に世界文化遺産に登録された軍艦島の建築物の保存に向けた取り組みについてお話しいただきました。軍艦島は1974年の閉山以降無人化しましたが、建物の内部には塩ビの配管が当時のままの状態に残っていて、それほど劣化していない状況を紹介していただきました。建物の維持管理・改修用に防水シートやドレーン廻りとして塩ビ材料の使用が期待されています。

続いて、（公財）鉄道総合技術研究所での取材では、鉄道車両の軽量化と安全性向上のために耐久性のある塩ビ製の部材が採用され鉄道の高速化に大きく貢献していること、また1964年に開業した新幹線には既に塩ビ床材が採用されていることなどを紹介しています。

スリーエムジャパン(株)では、塩ビマーキングフィルムが大阪の万博公園にある「太陽の塔」の黄金の顔に使用されていること、またデザイン性、色彩、耐久性などの特長と共に施工性の良さで塩ビフィルムが屋外の看板、自動車、鉄道、建物の壁面などグラフィカルな用途で拡大している様子を紹介しています。

次の「リサイクルの現場から」のコーナーでは、長年廃電線のリサイクルを手掛けている高山金属商事(株)を取材して、一時期はコン



ピューター解体で廃電線量が安定していたときもあったが、時代の変化と共に多様化し、電線被覆材の分別・リサイクルで苦労している状況を伺いました。

「インフォメーション」コーナーでは、事業譲渡を受けた2016年より塩ビレザーを使用した育児製品を手掛ける(株)水上の新商品開発の取り組みを紹介し、特に安全・快適な育児環境や介護をサポートする多彩な製品づくりに塩ビが大切な役割を担っていることを伝えています。

次に、塩ビ製の白いワーキングブーツ（作業長靴）でなじみのある弘進ゴム(株)を取材して、作業長靴がゴム製から塩ビ製へと流れが辿っていく背景や製品づくり、特に漁業や食品業界では耐油性と耐久性のニーズから塩ビが選ばれたこと、また成形技術力の優位性から国内生産にこだわりがあることなど話題が豊富です。

「広報だより」のコーナーでは、塩化ビニル管・継手協会が「下水道展'19横浜」に出展して、長寿命でリサイクルにも優れる塩ビ管をPRした様子、及び、VECが東京都中央区の「2019年子どもとためす環境まつり」に出展し、塩ビ製テントシートの端材を用いてリサイクルストラップをつくるワークショップの様子を紹介しています。

ご講読を希望される方は、下記メールアドレスまで、送付先・TEL・希望部数などをご連絡下さい。

info@vec.gr.jp

■ トピックス2

◇経済産業省が「世界の石油化学製品の今後の需給動向(2017年)」を公表

10月、経済産業省は「石油化学製品の今後の需給動向(2017年)」を公表しました。

その中から、昨年に引き続きPVCの世界における需要量と生産量(2017年実績を中心)について、リーマンショックで世界経済が落ち込んだ2008年の前年の2007年との比較で紹介します。

PVCの2017年の世界における需要量は約4,200万トンとなり、前年から約100万トン増加しました。世界的には2007年以降、リーマンショックがあった2008年を除いて年平均で毎年約3%需要が増加しています。主な地域、国別にみるとPVCの最大の需要はアジア地域で全体の58%、特に14億の人口を抱える中国は2007年の約1.8倍の約1,700万トンと全体の41%を占めています。絶対量は中国ほどではありませんがアジア地域ではインドが約290万トンと2007年の約2.2倍、インドネシアが約60万トンと約2.2倍、ベトナムも約50万トンと約3倍といずれも旺盛な需要が続いています。この他、中東が約170万トンと約2.1倍、アフリカが約120万トンと約1.9倍となっています。一方、2007年以降の需要が減少しているのは欧州、北米や日本等の先進国です。

2007年PVC 地域別需要量(34,259千トン)



2017年PVC 地域別需要量 (42,160千トン)

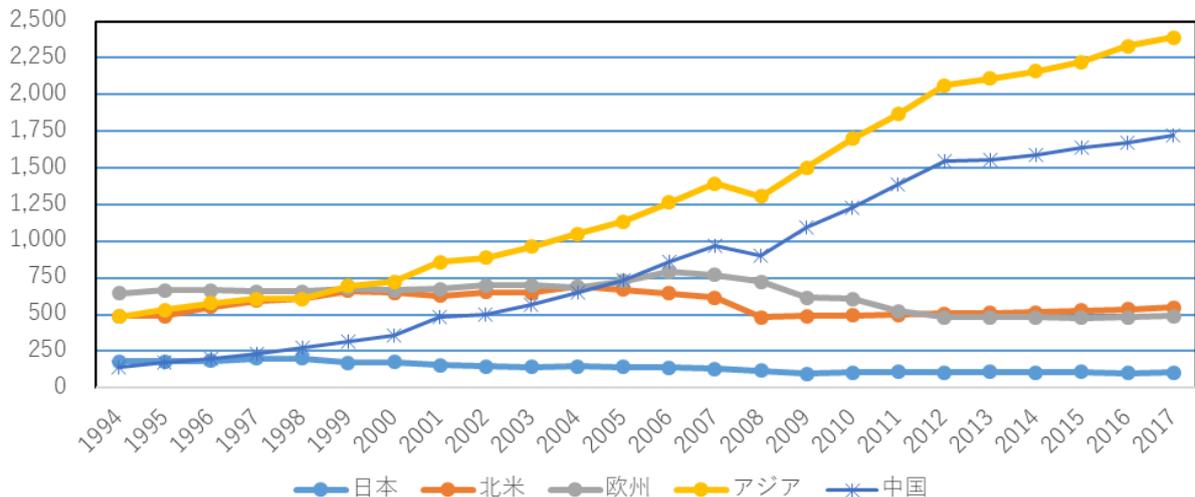


リーマンショックのあった2008年の前後で、世界のPVC需要構造が大きく変わりました。最も影響を受けたのは先進国で、2007年から2009年の3年で日本約25%、欧州約20%、北米約20%と一気に需要が減少しました。日本は2010年以降も需要が回復することなく現在に至るまでほぼ2010年と同水準（2007年比では約82%）、欧州は2010年以降も減少し続け2007年比で約64%、北米は2010年以降徐々に需要が回復し2007年比で約89%にまで回復しました。

一方、中国は2008年こそ需要は減少したものの、2009年には2007年比で約110%と増加に転じ、その後も年平均で6.5%増加、中東、アフリカもリーマンショックの影響は軽微で2009年以降増加し続けています。

需要量
(万トン)

PVCの地域別需要推移(1994~2017)



次にPVCの世界における生産能力と生産量について紹介します。

PVCの2017年の世界における総生産能力は約5,380万トン、総生産量は約4,460万トンとなりました。主な地域、国別にみるとPVCの生産能力と生産量の最大は中国で生産能力が約2,200万トン(全体の41%)、生産量が1,730万トン(全体の約39%)で稼働率約78.5%、北米が生産能力約920万トンに対し生産量約830万トンで稼働率約90%、欧州が生産能力約690万トンに対し生産量約570万トンで稼働率約83%、日本は生産能力約190万トンに対し生産量約170万トンで稼働率約90%となっています。

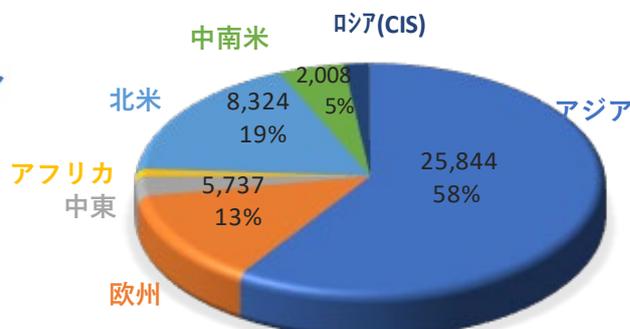
冒頭の需要量との比較で見ると総需要量約4,200万トンに対して生産量約4,460万トン

と差は 260 万トンですが、生産能力は 5,380 万トンと総需要量との差が 1,180 万トン、生産量とも 920 万トンの差があります。原因は中国で、過剰設備を抱えており実際の生産は約 80%弱しか行っていないことによります。同報告書データでは、中国の生産能力は 2013 年の 2,495 万トンをピークに 2017 年には 2,200 万トンと減少傾向にあります。また余剰設備を大きく抱えた状態が続いています。

2007年PVC地域別生産量(35,071千トン)



2017年PVC地域別生産量(44,586千トン)



日本は国内需要を優先して生産を行い余剰の PVC(2017 年約 60 万トン)を輸出に回していますが、北米のようにコスト優位な PVC を南米等の地域への輸出向けに生産(200~300 万トン)を行っている国もあります。途上国は生産が需要に追いつかないのが現状で足りない分は輸入に頼っています。近年特に輸入量の多いのがインドで国内需要の半分しか自国で生産できないため半分(約 150 万トン)を輸入に頼っています。この他、アジア、アフリカ、中南米等今後の発展が期待されている多くの地域、国が輸入に頼っている状況です。

今回公表の資料によれば、2023 年には PVC の世界需要量は約 5,300 万トンと今後も年率 2~3%程度で伸びて行くことが予想されています。

■ 編集後記

「新しい時代を Create する PVC 製品」をテーマとした PVC Award 2019 に、各方面から 100 点を超える作品を応募していただきありがとうございました。11 月下旬の審査を経て、12 月 18 日(水)12 時頃に受賞者の発表を行う予定です。発表は、公式 web サイト (<http://www.pvc-award.com/>) 上で行います。(PVC Award 2019 事務局)
その他のスケジュールは次の通りです。

表彰式 2020 年 1 月 10 日(金) 10:20~10:50 (会場: 如水会館)

展示会 2020 年 1 月 17 日(金)~26 日(日) (会場: GOOD DESIGN Marunouchi)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp
